

物語

1

つかれたからだのお前
熱のひどいお前は
カンテラを下げて谷に下りて行つた
小さな花の咲き乱れてゐる白い場所に腰を下ろし
お前はねむりについた
しづかな初秋の夜ふけの星
小さい天の花たちは
ただちいつと横顔に見入るだけだつた
やがてお前は助けられた
どうしてそんなにロマンチックなのだかわからないながら
お前をいぶかりながら
誰もがお前を哀れに思つた
青ざめて
咳ばかりひどくなつて
シーツの上で薔薇の花を恋しがつてゐたお前
僕はそれでも決心した
絶対にこいつと結婚すまい

2

僕をはじめて死人を見た
巡礼姿のお前だつた
手を組みあはせ
そのほほはほんのりと紅をつけ
きれいだねつて言ひたかつた
皆が居なくなつた時
僕はいつものやうにお前に近寄つた
つめたいお前！
目をつぶつてゐる
華やかな可愛い顔だね
ポプラーが窓からはよく見えた
葉も落ちつくして 銀の梢
（早くなほるといいねえ
結婚しようね）
嘘ついた悲しい思ひ出
その時誰か来たやうだ
（お前 永遠にさやうなら
ああ なんて お前のほほのつめたい事）

お前の眠つてゐる小さいお墓
たつた一度だけ行つた事がある
尾花を持つた派手な着物の
いきな女の側に並んで
僕はお前の前にながし間瞑目した
霜どけ頃のひどい小路を
まがりくねつてたどつて行つたのも全くその女の為だつた
あれはお前のいどこだつてね
黒い雲が岩木山でのたうつてゐたが
ほかは澄みとほつた空だつた
カンテラを持つて谷に下り 祈つたといふ人が
薔薇と 僕と 欲したといふ死にかかつた女の人が
もしお前でなくてその人だつたら
僕はきつと困つたらうに
お前の眠つてゐる小さいお墓
それもこれも昔の話になつてしまつた